

「道徳」とは

1 道徳とは何か その概念

あなたは道徳的人間ですか (YES・NO)

こう問われたら困りますね。あなたや多くの日本人は「いいえ」と答えるでしょう。まずは、道徳とは何か、その概念を理解しましょう。

「道徳」を概念的に理解するうえで、自分自身がいま問われてそう判断した、その判断基準が大切です。そこには、自分自身を見つめる目があり自分の内なるものとして存在している道徳的な判断基準があります。

殆どの日本人が自分は道徳的な人ではないと否定的に答えますけれど（日本人の特性ですが）、かといって、それぞれの道徳観は一様ではありません。自分の見つけ方も違います。確かめてみましょう。

表1 「道徳について理解する10の質問」

別紙に上記質問表を用意しました。それぞれの事例について道徳的と思うなら○、非道徳あるいは反道徳なら×、どちらもいえないなら空欄にしておきましょう。

5の事例は日常よくあるケースです。「(Aさんは) 午前10時に待ち合わせをしました。大いに急いだのですが、電車が遅れ待ち合わせ場所に着いたのは10時30分でした。」

反応はさまざまです。約束を守ろうと急いだのだから○だろう、いやいや不測の事態を想定して約束場所に向かうべきだ、だから×。結果的に約束を守れなかったのだから×。

どうでしょう。この事例をはじめ多くの事例に対する回答は人それぞれに異なっています。なぜなら、人はそれぞれの体験の中で様々な道徳的価値に遭遇しながら自分の見方や考え方はぐくんできているからです。このシートはそのことを確かめる事例を集めたものです。

確認 それぞれの道徳的価値観は一様ではない

私は女子大でこのシートを学生に示しました。ほぼ全員がノーで×をつけたのは8の事例。「イラクのアブドル・ラーマン・オベイディさんは2人のいとこを同時に愛して、同時に結婚しました」。許せないと彼女たちは怒りました。

8の事例はイラクでイスラム圏です。日本では重婚は禁止されていますが、あちらでは一夫多妻でOKです。そうすると、地域が違えば、善悪の判断は異なります。時代によっても異なります。

(1) 辞書が定義する道徳

ならば道徳とは何でしょう。辞書類では「道徳」について次のように解説されています。

○ある社会で、その成員の社会に対する、あるいは成員相互間の行為の善悪を判断する基準として、一般に承認されている規範の総体。法律のような外面的強制力を伴うものでなく、個人の内面的な原理（広辞苑）

○ある社会で、人々がそれによって善悪・正邪を判断し、正しく行為するための規範の総体。法律と違い外的強制力としてではなく、個々人の内面的原理として働くものをいい、また宗教と異なって超越者との関係ではなく人間相互の関係を規定するもの。（大辞林 第三版）

キーワードは、①「ある社会」、②「善悪の判断基準」、③規範の総体、④（個々の）内面的原理、であることです。

「ある社会」ですから、国や地域が違えば善悪の判断基準が異なり、しかもそれは内面的な原理ですから外からは見えにくく、個々違います。そして、辞書が定義する善悪の判断基準は自分でも気づかない無意識な原理として自分の意識の中で働いているのです。

ある社会 規範の総体とは

中国のブログに面白い記事がありました。

私ども日本人では普通の光景ですが、中国の人から見たら「感心すべき美德」に映ったようです。広辞苑では、道徳について「善悪を判断する基

【日本で感心したこと】

○駅の券売機でも、バス停でも、デパートのトイレでも、とにかくどこでも自分から列に並んで、割り込む人はいなかった

○公共の場所では大声で騒がず、電車内では携帯電話の通話が禁止されている

○日本では70~80歳のおばあちゃんも化粧をしている。とてもステキ

「道徳」とは

準として、一般に承認されている規範の総体」と述べていました。一般に承認されているということですから、一つ一つ承認を求めるものではなく、意識もせず当然なこととして振る舞っています。だから規範の総体なのです。

例えば、今や「空想・創作」として批判されていますが、その真偽はともかく、対面する傘を持つもの同士が、相対すると互いに傘をかしげあうような「江戸しぐさ」と呼称される「よき習慣」は、江戸時代にもそれ以前にも、また現在にも存在しています。慣習です。先のブログで、「どこでも自分から列に並んで、割り込む人はいなかった」「公共の場所では大声で騒がず」「70～80歳のおばあちゃんも化粧をしている」というのと同じで無意識で当然のことであって、それは、慣習を異にする他の国の人には見えない美德です。

(2) 道徳という語 原義は習慣

道徳とは

m o r a l i s

道徳にあたる英諺moral(日本でも道徳のかわりにモラルという表現がよく用いられる)は「習俗」を原義とするラテン語(mores)に由来する。この側面に注目すれば、道徳とは時代的、地域的に限定された特定の社会において成立している慣習的な掟(おきて)の総体とみることができる。したがって、いわゆる礼儀(エチケット)や作法(マナー)も、道徳の一部である。

ジョン・ロック John Locke

道徳

「神の法」と「市民法」と「世論の法」(「風習の法」)

慣習的道徳 日本大百科全書(小学館)

「道徳」という語には若干解説が必要です。

上記日本大百科全書(小学館)によれば、英語Moral(モラル)はラテン語moresに由来し、「道徳とは時代的、地域的に限定された特定の社会において成立している慣習的な掟(おきて)の総体」と述べています。

私たちは時代に生き、地域に生き、知らず知らずに階層を受け入れ、また職業にも就いています(無職を含め)。そして、そこには、知らず知らずに蓄積され常識となった善悪や正邪の判断基準や行動様式があって、社会を営んでいます。「文化とは根雪

のようにへばりついた習慣のようなもの」と司馬遼太郎は述べています(注1)。日本文化とか中国文化とか、欧米文化とか言われる文化があるように、社会が異なれば、その習俗や習慣も異なり、日本大百科全書のいう慣習的な掟も異なります。

先に述べた女子大の学生が8の事例を否定するのも、時代的、地域的に限定された特定の社会において成立している慣習的な掟の総体がなせるものなのです。

(3) 道徳と法との違い

触法行為は道徳的な行為とは言えないということは誰でも納得するでしょう。法にも成文法や慣習法があることは知られていることです。法も合意形成で成立しますから、社会の慣習と無関係ではありません。ならば、道徳と法の違いは何でしょう。

掟? 道徳と法との違い

法の外面性と道徳の内面性		トマジウス
法	人間の外面的な行為を規律する	
道徳	人間の良心に対し内面的な平和を達成	
合法性と道徳性		カント
法	動機とは無関係に行為が義務法則に合致すること(合法性)が要求される	
道徳は	動機そのものが義務法則に従うことが要求される	

トマジウスとカントの仕訳が上のシートです。Uchidaは、トマジウスの方が分かりやすいと思います。要するに法が外面的な行為を規律するものであるのに対して、道徳は人間の良心に対する内面的な平和を達成するもの、要するに外面的な行為か内面的なものかの違いです。カントも法と道徳との違いを動機との関係の有無に求めていますので、仕訳方は同じです。

内面で思うことで罰せられたら大変なことになります。道徳は内面に存するものなので罰はありません。この内面的であることが道徳の授業づくりの根幹になります。それぞれの内面ですから察するしかないのです。

(注1) 「街道をゆく」本所深川散歩・神田界限
司馬遼太郎

「道德」とは

(4) 語「道德」の確立

述べてきたように道徳的慣習は無意識の規範であり内面に潜在している慣習のようなものですから、それを「道徳」とか「道徳的実践」などと概念化され言語化されても意識されてはいません。概念がないところに言葉はないのです。それが、今や「道徳」と言語化されて共通語です。ならば、私たちが、語「道徳」はいつ出現したのでしょうか。実は、道徳という語自体は中国古典にあったのです。

語「道徳」は翻訳語

「道徳」はもともとは漢語・儒教語

「老子」 (道徳経)
礼記「曲礼」 (道徳仁義非礼不成)
三略「下略」 (求賢以徳、致聖以道)
易説卦 和順道徳而理於義
論語 等

原初道徳

道徳＝漢語 儒教？

中国の古典「老子」には「道徳経」があり、礼記「曲礼」にも「道徳仁義非礼不成」と「道徳」があります。「老子」も「礼記」も儒教です。儒教概念として「道徳」は存在したのですが、ならば、道徳は漢語で儒教でしょうか。いえ、語「道徳」は、儒教語ではなく翻訳語です (注2)。

明治維新

欧化政策

西洋文化の移入

翻訳

religion ethics moral science

宗教

倫理

道徳

明六雑誌(明治7年～8年 43号で廃刊)

訳語：漢語を充てる手法

明治維新がなって、政府は西洋文化の移入する欧化政策を急ぎました。そこに大きな役割を果たした

のが、森有礼以下、西周、福沢諭吉、中村正直、西村茂樹等の主として旧幕府開成所出身の洋学者が参集した明六社で、その明六社が発行していたのが明六雑誌 (注3) でした。内容は政治、宗教、婦人、貿易、貨幣、歴史、法律、風俗、教育、哲学などのほか、国字論、出版の自由などに及んで幅広く、啓蒙思想の指針となったと言われていますが、この雑誌は西洋出版物を翻訳して日本語化するという点で、文明開化に大きな影響を与えました。religion が宗教に、ethics が倫理に、moral science は道徳科学にという具合で、今までにない西洋の概念を漢語または和製漢語に置き換えていったのでした。

語「道徳」も Moral を上記した老子や礼記に見える漢語に置き換えたものだったのです。

Moral 品行 習慣

moral

語源

mores mōrālis

mōs 習慣 + -AL = 習慣に関する

品行 習慣的な儀礼

モラル・サイエンス、正経、修身、良心

「道徳」

(注)

- 『徳学講義』明治26年 西村茂樹
- 明六社、明六雑誌

明治初期の啓蒙思想団体。森有礼の主唱により、西村茂樹、津田真道、西周、中村正直、加藤弘之、福沢諭吉、箕作秋坪、神田孝平らを社員として1873年に結成、この年が明治6年であったことから「明六社」と名づけられた。会合を毎月2回開き、機関誌『明六雑誌』を発行した。社員には開成所出身の旧幕府吏僚が多かった。政治、経済、教育、宗教、思想、哲学、婦人問題など多くの分野で開明欧化、自由進取の立場から論陣を張り、封建思想を批判し、開国政策の理論的代弁者として啓蒙的役割を果たした。75年11月政府の讒謗律、新聞紙条例による言論弾圧で『明六雑誌』は廃刊となり事実上解散した。(ブルタニカ国際大百科事典)